源氏物語における女三宮事件の意義 (一)

― 降嫁事件を中心として ―

重松信弘

一

女三宮事件とは、朱雀院の皇女・女三宮の源氏への降嫁事件と、柏木と女三宮との密通事件とを併せていう。両者は一応別のものではあるが、深い関連がある。この事件については、考察の重点を朱雀院・源氏・紫上・女三宮・柏木などの主要な人物におくものが多く、また事件表現の特異性に注目するものもある。既に多くの考察がなされているのに、今更この問題を採り上げるのは、「屋下架屋」の譏りを受けるかもしれないが、それにもかかわらず、敢てこの問題を考察するのは、多少ともそれらの説と違う見解があると思うためである。それはこの問題の主要な人物について問題の意義を考えると共に、それを源氏物語全体の立場からみて―少なくとも源氏の全生涯における問題として―そのことの意義を考えるのである。即ちこの事件は源氏の青年期・中年期の課題を承けて、晩年期に展開させ、更に宇治十帖を誘発する意味があるものとみる。このような観点を採ることは、今までの諸家の研究と同じでないが、部分的には重複することも少なくないであろう。

この物語全般にわたるテーマであるが、それは男女間の愛情を主とするという見解を採り、その課題が源氏の青年期・中年期・晩年期を、更には宇治十帖にも一貫して追求されているものとして、この事件の意義を考えようと思う。このようにこの問題を捉えると、単に若菜上下の巻と柏木の巻との問題たるにとどまらないで、この物語全体からその意味を考えるべきこととなる。先ず青年期・中年期からの問題の継承という意味を考える。青年期の主題を簡単にいえば、恋愛の追求とその蹉跌を描くものといえよう。専らそれを追求している時期が、源氏の得意時代（花宴の巻まで）であり、その追求から蹉跌した時期が、失意時代（明石の巻まで）である。得意時代に愛情の対象とした女には、正妻葵上は別として、藤壷・六条御息所・空蟬・夕顔・末摘花・朧月夜・紫上などがある。行きずりの恋も少なくなかったようであるが、表面には軒端荻・源典侍・中川の女・筑紫の五節などが出ている。但しこの物語は源氏の立場で、このような恋のすさびを描くことだけが目的ではなく、源氏を主軸として、それぞれの身分・境遇を異にする女の容姿・才能・心用いなどを、一言でいえばさまざまの女のあり方を描くことに、重点があ

るともいえる。それにしても、それぞれの個々の女のあり方を描くために、源氏の恋のすさびが必要なのであり、一貫したものに注目するならば、源氏の恋愛の追求を主題とするといえる。

源氏の恋愛の追求には、青年の血気にはやって社会の秩序を破るものがあり、その上政権の交替もあって、その報いを受けて失意時代を迎える。源氏が咎められるべきものに空蟬・藤壷・朧月夜との関係があり、また六条御息所を冷たくあしらったことがある。空蟬はすぐ身を引いたので問題はない。藤壷との恋は破倫の甚だしいもので、いつかその罪の報いを受けねばならない。もし受けないなら、仏教の応報の思想に背き、道徳の正義にも背くことになる。勿論背いても文芸としては差支ないが、この物語や紫式部日記をみると、作者は宗教や道徳を無視することはできないように思われる。六条御息所は前皇太子妃であって、プライドの高い女であるが、その心を破った報いも考えられる。それは生前物の怪となって夕顔・葵上に憑いて殺し、死後も二度死霊の物の怪となって、紫上・女三宮に憑いて源氏に報復する。朧月夜のことはその始はともかくとして、後には当帝の妃を犯したのであり、その報いとして須磨への退転を余儀なくされる。須磨から明石へ移り、ここで明石上と結ばれるが、それは父入道の希望によることで、源氏の恋のすさびとはいいがたい。源氏の恋愛遊戯は花宴の巻（二十歳）の朧月夜との出合いを最後とする。源氏は青年期得意時代における六条御息所と、朧月夜との恋のすさびの報いを受けて、失意時代の苦渋を味わうが、最も重大な藤壷との関係については応報を受けず、心の中に負目として潜在するのであった。

中年期になると、源氏は青年期に関係した女にそれぞれ所を得させ、全然新たな女と関係を結ばない。但し六条御息所と藤壷とは死ぬるが、御息所の女の秋好が源氏の後見で、冷泉帝の女御（後中宮）となって舞台に上る。紫上は正妻格となり、明石姫君を生んだ明石上は特に重んぜられ、花散里・末摘花にもそれぞれ所が与えられ、空蟬も引取られて落付く。このように青年期のすべての女を落付けてから、実子の夕霧と養女の玉鬘とを中心とした物語に移り、特に玉鬘を中心として源氏の栄花の生活の物語が始まる。その中心の舞台は新たに造営して、四町を占めた広大な六条院であり、前からの二条院と併せてそれぞれの女をそこに配し、平穏・安楽な栄花の生活を楽しむ。中年期に取扱われている素材には、この栄花の生活を享楽さすものが甚だ多い。自然的素材（納涼・雪まろばし・胡蝶・螢・篝火・野分・其他）邸園の造築（二条院・六条院・大井邸）諸種の行事（神仏参詣・行幸・男踏歌・裳着・衣配り・騎射・船遊び・双六・新年の廻礼・臨時の客等）種々の芸能（絵画・絵合・薫香・歌謡・書道・絵物語）各種の評論・教訓（物語論・和歌論・学問論・春秋論・人物評・教育論・子女への教訓等）があり、これらは皆当時の宮廷人の栄花の生活を充たすため必要なものである。そしてこれらは他の三期よりも―特に宇治十帖に比べて―甚だ多く、かつそれらには三期にないものが少なくなく、六条院中心の栄花の生活はこれらによって、花やかに彩られている。このような栄花享楽の生活の描写に―即ち美的主情主義に生きる生活の描写に―中年期の物語の重点がおかれているので、これを主題とみてよいであろう。

この主題を達成するためには、人間関係の宥和が必要であり、青年期のような奔放な好き心のすさびがあってはならない。源氏は青年期だけの女を擁して、新たな恋愛は開拓せず、夕霧と玉鬘とを中心にして、栄花の生活が描かれる。しかし中年期になって分別ができたからといって、恋情を全く無くしてしまうことはできない。秋好・朝顔・玉鬘などに愛情を感ずるが―特に玉鬘にはかなり強く引かれるが―それを強く自制したのであり、このことは中年期の主題を達成する必要な要件であった。もしこれらの女と新たな恋愛関係ができたら、紫上は安らかでなく、六条院の平和は必ず破られたはずである。源氏の自制による六条院の平穏な栄花の世界は、青年期の恋のすさびとその蹉跌という動揺波瀾と好い対照をしている。この源氏と歩調を合わせるように、夕霧までが雲井雁を辛抱強く待つという美談を作っている。要するに、中年期の平穏無事な栄花の生活は源氏が強く恋のすさびを抑制したことの上に築かれているが、晩年期にはこの抑制の心が弛んだことから、女三宮事件が生じて、六条院の平和が破れる。

女三宮事件はひとり源氏晩年期の問題たるにとどまらないで、青年期・中年期を受け、更に宇治十帖に蔭をおとしており、この物語の中で極めて重要な事件である。青年期を受けるというのは、好き心の復活の意味と、藤壷事件に対する応報の意味とであり、中年期を受けるというのは、好き心の復活には、長い間辛抱してきた中年期自制の反動の意味があるためである。源氏は中年期十二年間、動く好き心を押さえて六条院の栄花を築き上げ、藤裏葉の巻では現世生活が申し分なく充足された。満ち足りた心の弛みか、或いは栄光の心奢りか、晩年になってまた好き心が動いて新たな女を求め、せっかく築いた六条院の平穏な世界の基盤にひびが入ることとなった。青年期のように、源氏自身が進んで女三宮を求めたのではないが、朱雀院の意向を渡りに舟と、喜んで受け入れたのであり、そこには往年の好き心が強くはたらいている。物語としては、六条院の世界が完成してしまって、平穏でめでたいさまとなったので、その平板・倦怠を破って、新たな感動を創り、物語の世界を展開さすためには、これが必要な方途であったろう。またこの源氏の好き心のすさびと歩調を合わせるかの如く、柏木の恋情の奔流があり、更にまめ人夕霧までが、まるで人が変ったように、落葉宮に対する強引な恋慕があり、晩年期は中年期とは打って変って、再び恋情がその世界構造の原動力のようになっている。

降嫁事件と密通事件とは関連はあっても、事件の本質は違っており、前者には降嫁に至るまでの事情と、その後の事態に、後者にも密通に至る事情と、その結果に重大な意義があるが、両者では事件に関与する主要な人間が違い、また事件の意義が全く違う。ただ前者の中に、柏木の密通を誘う事情が潜んでおり、後者の結果によって、源氏が前者の（更に藤壷事件の）応報を受け、紫上の心情にも変化を与える意味があって、両者は密接に関連している。前者は若菜の上巻に起こり、その重大な影響が下巻で描かれ、後者は若菜の上巻で萌し、下巻で起こり、柏木の巻で重大な結果が描かれている。両者の余波は宇治十帖に及び、外面的には女三宮と薫とによって継続し、内面的には薫と八宮一家の現世厭離の思想と連っている。ここでは先ず降嫁事件から考察するが、最初に降嫁に至るまで

の事情を検討して、この事件の責任の所在を明らかにし、次に降嫁によって六条院の世界―紫上の身の上―に及ぼした影響を考える。

二

女三宮降嫁の事情については、朱雀院の異様なほどの聟選びの詮議と、源氏がこれをうけるに至った心情とに注目すべきである。この事件の決定に、朱雀院に責任があるとする説と、源氏に重大な責任があるとする説とがある。前者によれば、このことの責任はすべて誤った考え方をした朱雀院にあり、源氏は特に責められるべき点はない。源氏は始終受身の立場にあり、責任があるとすれば、院の再度の懇請を拒まなかったことにあるが、それは当時の状況からみて甚だ困難であるという。私は院よりも源氏に責任があるとするのであり、以下そのことを考察するが、なおこの問題については、何故このようなまぎらわしい描写がなされたかという問題も、考えるべきであろう。

朱雀院は病身のため出家を思い立たれるが、母を亡くして、頼り所のない女三宮のことが気になる。内親王の独身の例は多いが、この宮は甚だはかなくて頼りなく、万一浮名の立つようなことがあっては困るので、誰かしっかりした人に縁付けておきたいと思って、聟選びの詮議をせられ、夕霧・藤大納言・螢宮・柏木などを候補者として考えられる。夕霧は雲井雁を得てふり向こうともせず、他の三人は帯に短かし、襷に長しの感じがし、結局源氏がよいということになるが、それまでに、源氏についてもさまざまな詮議がなされる。院は宮の人がらの幼さから、源氏が紫上を育てたような人がほしいといわれ、宮の乳母は源氏は今に人をゆかしく思うのだから、宮を引受けるだろうという。院は古りせぬ源氏の好き心が気がかりだといいながらも、「親ざまに」譲ろうかと思われる。また源氏は素晴らしいとほめて、「われ女ならば、同じはらからなりとも、必ず睦び寄りなまし」などともいわれる。乳母の兄の左中弁は源氏の所にも出入していて、よく源氏を知るが、乳母に宮の降嫁は源氏の望む所であろうという。しかし乳母は院に、宮を望む人は多いのだから、慎重に考慮すべき旨を申上げ、院も定めかねて思い悩むが、結局源氏に託するのが、一番安心だと思われるようになる。東宮もまた源氏がよいと申上げたので、いよいよ決意せられて、左中弁が院の旨を源氏に伝える。この詮議はなかなか慎重であり、源氏について欠点も考えるが、結局大所高所から源氏が一番安心だということになる。

源氏は左中弁から話を聞いて、年をとっていて前途が短かいことだから、心苦しいといって断る。左中弁がなおも説くと、「さすがにうち笑みつつ」冷泉帝に差上げたらよいなどといい、宮の母は藤壷の妹で美しいといわれた人だから、「この姫宮、おしなべての際(きは)にはよもおはせじをなど、いぶかしくは思ひ聞え給ふべし」という。即ち老年を理由に断りはするが、それでもこの話には「さすがにうち笑み、」また姫宮を「いぶかしく」思うのであった。「いぶかし」には「ゆかし・何となく慕はし・更によく見たし・又は聞きたし」（源氏物語辞典）などの意味があり、源氏は宮に心が引かれている。

その後院は病気を押して、宮の裳着の式をすませて出家される。少し御心地のよろしい時に、源氏が訪ねていろいろな話をする。それとなく宮のことが気がかりだといわれるので、源氏はお気の毒に思うが、「御心のうちにも、さすがにゆかしき御有様なれば、おぼし過ぐしがたくて」、東宮がおられるので、頼んでおかれたら心配することはないが、なお気になるなら、聟をきめられたらよいと申上げる。院に同情もするが、それと共にまた自分も宮を「ゆかしく」(何となく慕はし・知りたし・見たし・聞きたし)(源氏物語辞典)思う心に催されて、黙っておれなくなって、東宮に任せばよいとか、聟を選べばよいとか、格別意味もない辞令的なことをいう。そこで院は女三宮を「取りわき育くみおぼして、さるべきよすがをも、御心におぼし定めて、預け給へと」頼みたいのだが、夕霧は妻がきまって残念だといわれる。院が源氏に対して「さるべきよすがが、云々」といわれたのは、源氏に娶ってくれというのではない。適当な聟を見立ててもらいたいという意味である。勿論院は源氏に娶ってもらいたいので、この言葉の裏にその心持が匂わしてあるが再考してくれと懇請されたというものではない。この院のお言葉に対して、もし源氏が宮を「ゆかしく」思わないなら、自分の初志を申上げて、然るべき聟を考えましょうと返答することが、困難だとは思われない。然るに源氏は院のお言葉を待っていたように、夕霧は未だ未熟である。私が引受けましょうと、実に驚くほどあっさりと承諾する。それは前に断ったことを思うと(その断った事情は少しも変っていないから)、意外と思われるほどやすやすと引受けている(院の再度の病床での懇請を断るのは、当時の状況からみて難事に属するという説には賛成しがたい)

作者はここで源氏があっさり引受けるようになることを、前々から準備している。最初に左大弁に断ったのは、まだ女三宮に対する認識が十分でなかったためであり、(特に宮に心が引かれないなら)このように断るのが正常な考え方である。源氏は当時初老といわれる四十歳になり、宮は十三四歳で、年齢は甚だしく釣合わない。身辺には紫上をはじめ多くの妻妾がいて、安らかにすごしている。そこに新たに甚だ若い内親王を正妻として迎えると、波瀾の起こることが当然考えられる。断るのがノーマルであり、また断れないはずがないから断ったのである。然るに源氏は宮に心が引かれるようになって、心が変って、宮を娶りたく思うようになったのである。心が引かれるようになったことを、作者は話のふしぶしで匂わしている。左大弁に断って後も、いろいろと聞いて、「さすがにうち笑みつつ」語り、また藤壺の姪だから美しいだろうと、何となく慕わしくも思っている。院に会っても「御心のうちにもさすがにゆかしき御有様なれば、おぼし過ぐしがたく」なって、宮に関する話を自分から進めて行くのであり、これらのことは宮に対する心が、動いていることを示すものである。このように源氏は心が動いて、あっさりと宮を引受けたのであるが、源氏が引受けるということは、傍からも十分予想されていたさまである。

乳母から話をきいた左中弁は、源氏が常にこの世の栄えは十分で不満はないが、「女の筋にてなむ、人のもどきをも負ひ、わが心に飽かぬ事もある」と話すといい、この「飽かぬ事」を、多くの妻妾はそれぞれにすぐれてはいても、「限りあるただ人ども」で、身分が

源氏に釣合わぬ意味だという。そして宮が降嫁したら「いかにたぐひたる御あはひならむ」といい、更に「かの院（源氏）には必ず承け引き申させ給ひてむ。年頃の御本意かなひておぼしぬべき事」だという。これより早く、乳母は「かの院（源氏）こそ、なかなかなほいかなるにつけても、人をゆかしくおぼしたる心は絶えず、物せさせ給ふなれ。その中にもやんごとなき御願ひ深くて、前斎院などをも今に忘れがたくこそ、聞え給ふなれ」といい、朱雀院は「その古りせぬあだけこそは、いとうしろめたけれ」といわれる。ここの「ゆかしく」思うを「源氏物語新釈」では露骨に「女に手を出したがる癖」という。「やんごとなき願ひ」とは身分の高い女を願うもので、前の左中弁の話と照応し、「古りせぬあだけ」はいつまでも変らない好き心である。源氏に対して、このような昔に変らぬ好き心があり、また今までの女と違った身分の高い女を望んでいるといい、女三宮を引受けることが、年来の本意に協うことを、他人の口を借りて説かれている。また宮の降嫁の後、紫上は侍女達が気をもんで、歎かしげなのをみて、気を引立てようと、「かくこれに（六条院に）あまた（女が）ものし給ふめれど、御心にかなひて、今めかしく、すぐれたるきはにもあらずと、目馴れてさうざうしくおぼしつるに、この宮（女三宮）のかく渡り給へるこそ、目やすけれ」と語って、わざと明るい態度を示すが、ここでも紫上の口を借りて源氏が「今めかしくすぐれたる際」の女を望んでいたことを告げている。

以上のように源氏自身の心と、左中弁・乳母・朱雀院・紫上の話とによって、源氏に女三宮を受入れることを喜ぶ心のあることが示されている。降嫁事件はこのような源氏の心によって成立したのであり、ことごとしい詮議をした朱雀院の責任で起こったのではない。朱雀院の責任は軽く、強いていえば源氏に話を持って行ったことの責任はあるが、それにしても最後の決定は源氏がしたのであるから、責任の所在はおのずから明らかである。この問題は源氏自身の問題で、その責は源氏が負うべきものであり、また事実源氏が負っている。この事件から紫上との間が疎隔して大いに心を痛め、更に柏木と宮との密通事件が起こって、他人の子をわが子とせねばならない苦渋を味うが、これは当然源氏が自分のこととしてきめたことに対する報いである。もしこの事件の責任が朱雀院にあるとするならば、源氏は院によって起こされた事件のため、責任もないのに報いを受けることになり、これほど不合理なことはない。また源氏は院の意向のままに追随する程、自主性のない人間でもなく、自分の気の進まぬ女を押しつけられて、引受けるようなお人好しでもなく、またそのように弱い立場でもない。源氏は宮を迎えたのは自分がしたことだと思っており、その責も負っているのであり、朱雀院の責任とすべきではない。

この事件を源氏の好き心の動きによるとみることで、青年期・中年期を受けて、物語の世界が進展する意味がはっきりする。即ち青年期の好き心のすさびが、喜悲交々の波瀾のある世界を築き、中年期の好き心の自制が、平穏無風の六条院の栄花を築いたが、晩年期にまた好き心が生動して、中年期の自制の心を破り、六条院の和平の世界を傷つけることとなったのである。なお宮の降嫁が好き心によることは、降嫁後の源氏自身の思いにはっきり出ている。降嫁の

後、紫上の物思わしいさまをみて心苦しくなり、「などてよろづのことありとも、また人を並べて見るべきぞ、あだあだしく心弱くなりおきにけるわが怠りに、かかることも出でくるぞかし」と、「われながらつらくおぼし」て涙ぐむ。「よろづのこと」とは朱雀院のおもむけであろう。「人を並べて見る」という思いは、不真面目であり、宮を迎える心に好色の思いのあったことが、言外に出ており、「あだあだしく心弱くなりにけるわが怠り」で、好き心に流されたわが怠慢を思い、それがわれながら辛いのである。以上の思いからも、今まで自他によって端々で述べられていた源氏の本心が—人を並べて見たいというようなあだあだしい好き心のあることが—はっきりと露呈している。

源氏のこの好き心の発動によって、六条院の和平の世界が傷つけられるが、このことは「現世的あはれ」の世界のはかなさを思い知らせ、紫上と源氏との仏道への心の傾斜と、宇治十帖との準備となっている。源氏が中年期を通じて努め、藤裏葉の巻で完成した現世的栄花が、六条院を舞台として続く限り、宇治十帖の心は描けない。作者が宇治十帖の心を描こうとするならば、どうしても六条院の現世享楽の世界を破るか、少なくとも欠陥を剔抉して、それを傷つけなければならない。女三宮の降嫁事件は六条院存立の基盤を傷つけて、仏道への心の傾斜を描く途を開くものである。

しかし六条院の栄花は物語のすぐれた人的・物的要素をすぐって築かれた「現世的あはれ」の世界であり、容易に破れるものではない。これを築いた源氏でも、これを破るのは自分の生き方を損うのであるから、容易にできることではない。この容易にできないことを源氏に行わせるために、降嫁事件を持出して、用意周到な描き方をしたのである。それは中年期に自制していた源氏の好き心が再び生動するような、巧みな状況設定をするためである。源氏よりも或いは読者を納得さすため、朱雀院の慎重な選びの詮議がなされ、その間に徐々に源氏の好き心が発動するような状況を設定して、源氏の心を動かしたのである。朱雀院の慎重な詮議は、院の持って生まれた優柔不断な性格によることが多いが、物語としてはこれをうまく利用して、六条院の厚い壁を破る突破口としたのである。六条院の和平を破るためには、既に多くの女をみてきて、今は自制している源氏の好き心を誘発せねばならないが、そのためには若々しい内親王を擁して、あのような詮議を重ねて結論を出すことが、極めて効果的である。このため源氏が宮を引受けることを当然とするような状況設定ができて・源氏は自然に好き心の発動の場を得ることとなった。かくて源氏の承諾は止むを得ないことのような、錯覚を起こさすが、実は外部の状況設定の蔭に、源氏の好き心が動いていたのであり、そのことは例の作者の手法—朧化的描写法—の中でちらついている。外部の催しと、それに応ずる内部の心の動きとによって、極めてなだらかな進行の中に、六条院体制をゆるがす力が養われて行った。そしてそのことによって、最初に傷つけられたのは紫上であるが、それははね返って源氏自身の苦渋ともなり、更に柏木と女三宮との密通ともなって、六条院体制は形の上からも、心の上からも、大いに揺り動かされ、その和平は損われることとなる。六条院の和平の損傷を象徴する紫上の苦悶と、そのことの源氏への反照とを、次に検討する。

三

女三宮降嫁後の六条院の状況を、宮の子供のようなあどけない性格と、紫上の深い思慮とによって、多少の紫上の心苦しさはあるにしても、格別の事もなく平穏にすぎているとする見方もある。表面的にはこのような見方もできるが、仔細に検討すると、紫上の苦悶とそれのはね返りを受ける源氏の苦衷とが、脈々として流れており、特に紫上の思いは、六条院存立の根本を脅かす性質をもつ。即ち六条院存立の原理である「現世的あはれ」に生きることを不安とし、それから離脱しようとする思いが、育くまれつつあった。

源氏は女三宮を引受けると、すぐ「なま心苦しく、さまざまにおぼし乱る」というが、これは引受けたことに対する心の鬼で、紫上を憚るためである。紫上の「何心もなくおはするにいとほしく、このことをいかにおぼさむ」と心が乱れる。そして降嫁が止むを得なかったように、取繕って話す。院が宮のことを「いと捨てがたげにおぼして、しかじかなむ宣はせつけしかば、心苦しくて、え聞えいなびずなりにし」とも、若い女のことなどは今更「すさまじく」思われるので、一度は断ったが、直接対面した時、「心深きさまなる事どもを宣ひ続けしに、えすくすくしくもかへさひ申さで」ともいう。しかしこれは院と対面した時の実状ではなく、また今更「すさまじく」思われるなどということが、本心でないことは既に述べた。源氏は明らかに取繕って嘘をいっている。嘘をいわねば紫上に対してすまないのであり、止むを得ないように取繕って、諦らめてもらおうとするのである。

紫上は表面は平静にもてなし、止むを得ないことだから、他から屈託しているようには思われたくないと思うが、それでも降嫁は心外であり、人笑われなことだと思って、心は穏かでない。いよいよ宮が六条院に移って来ると、結婚三ケ日の夜がれも淋しく、物思わしいさまなので、源氏も前に引用したような、わが好き心の怠りでこんなことになったのだと、われながら辛くて涙が出る。出かけるとて源氏が気嫌をとると、紫上は、「目に近く移れば変る世の中を行末とほく頼みけるかな」と詠み、源氏を見送っても「いとただにはあらずかし」というさまである。そして世の中の頼みがたいことをしみじみと感じ、夜の床に入っても眠れない。源氏が紫上の悩んでいるさまを夢に見て、夜深く帰ると、紫上は御衣を涙でぬらしている。表面は平静にして宮とも仲よくするが、心の中は晴れない。「手習などするにも、おのづから古言(ふるごと)も、物思はしき筋のみかかるるを、さらばわが身には思ふ事ありけりと、みづからぞおぼし知らるる」という。この驚くべき微妙な無意識の心理描写にも、陰にこもった物思いのほどが、薄気味悪いほどまざまざと描かれており、「身に近く秋や来ぬらむ見るままに青葉の山は移ろひにけり」ともよむ。

源氏には、紫上の事にふれて苦しいさまであることが分かり、それを押しかくしているのが「ありがたくあはれ」に思われる。このように「あはれ」に思いながら、それでも好き心のすさびは止められず、朱雀院が出家されたので、二条院へ移った朧月夜を、時々訪ねて会うのであった。中年期に自制した好き心は、女三宮で動き、

今また朧月夜で動き、全く古りせぬあだあだしさであるが、紫上はもう嫉妬もしない。明石上・朝顔などの時は嫉妬して源氏をてこずらせたが、今は嫉妬する気もなくなっている。かくて表面だけは穏かに月日が過ぎるが、紫上の思いは昂じるばかりであり、源氏はそれを気にはするが、その深い思いを十分察知することはできない。若菜上の巻はこの後明石入道一家の物語、柏木の女三宮恋慕のことがあって、下の巻に入る。四ケ年の空白があって、冷泉帝が退位し、今上帝が即位して御代がわりとなる。

ここに四年間の空白があるが、それは何を意味するであろうか。もとより書くべきことがないという意味はあるであろうが、それにしても、この間の経過の意味する所は、その後の物語の変化から、おのずから推知することができる。変化とは紫上がついに出家を望むようになったことと、源氏の愛情が宮に注がれるようになったこととである。このことは紫上が表面はともかく、心の中で悩み続けていたことと、宮が次第に生長して、源氏の愛情をうけるにふさわしくなりつつあったこととが、この四年間の空白に含まれていることを意味するであろう。穏かに(1)「この世はかばかりと見果てつる齢」にもなったから、のどかに行いをしたいと申出るが、源氏は許さず、自分が出家したらその後でともかくもせよという。他方女三宮には朱雀院・當帝という有力な後見があり、二位に叙せられ、所領も加わって、威勢がよくなる。紫上は(2)「あまり年積りなば、御心ばへ（源氏の寵愛）もつひに衰へなむ。さらむ世を見果てぬ先に、心と背きてしがな」と始終思うが、あまりさかしいように思われようかと憚られて、強くもいえない。そのうち源氏は宮の所へ、紫上の所と同じくらい行くようになるので、思った通りであると、心が安らかでない。特に源氏は朱雀院の御賀の時のためだとして、心を入れて宮に琴（きん）を教える。源氏が明暮教えるので、宮の手も次第に上って行く。それは紫上にも明石姫にも教えなかったものであり、明石姫（この時女御）は「などて我に伝え給はざりけると、つらく思ひ聞え給ふ」という。女楽の当日、宮は「いと面白くすまして弾き」、後で紫上に源氏が大変上手だったろうと話す。このことは宮の所へ紫上の所と同じくらい行くという事と共に、宮が生長して、源氏が宮を愛するようになったことを示すものであるが、これは逆に紫上の心を痛める。今年は三十七の厄年に当たり、(3)「心には堪えぬ物歎かしさのみ」加わり、余命がいくばくもない心地がするから、以前から願っている出家を許してほしいと頼むが、源氏は許さず、別れ別れになっては生きるかいがないという。源氏のいないある夜、物語などを読ませて聞き、わが身の上を(4)「怪しく浮きても過ぐしつる有様かな」と思い、また(5)「人の飽かぬことにする物思ひ（嫉妬の思い）、離れぬ身にてや、やみなんとすらむ。あぢきなくもあるかな」と、思い続けて寝た暁から胸が痛み出す。加持・祈禱と手をつくしても、弱って行くばかりであり、時々起こる胸の痛みが、堪えがたげに苦しげである。宮の降嫁以来堪え忍んできた心の痛苦が、ついに肉体を犯したのである。

(1)のこの世はかばかりと見極めたということが、喜ぶべき意味においてでないことは、その後の思いで知られる。女三宮は院と当帝との心よせが厚くて、次第に勢を増すのに対して、紫上は源氏の愛情の外には頼りどころがない。その源氏の心も(2)年をとって衰える

ことを思うと、今のうちに出家したいと思うが、許されない。(4)怪しく浮いて過ごす身であり、(3)堪えぬ物歎かしさ、(5)忍びがたい物思いの加わる身と思う苦悩が、積って起こった病気であるから、どうしてもよくならない。それで翌二月には静かな所でと、二条院へ移って療養をする。更に出家を望み、許さぬことを恨むが、源氏は出家した姿をみては、「片時も堪ふまじくのみ、惜しく悲しかるべければ」とて許さない。正月から二月・三月と経て、四月に入ってもよくならず、二条院には源氏をはじめ多くの人々が集まって力をつくすので、六条院は「火を消ちたるやう」になり、この隙に柏木が女三宮と密通する。紫上の病気は更に悪くなって正気を失うが、源氏が加持・祈禱とあらん限りの力をつくして、漸く命はとりとめる。この時も六条御息所の死霊の物の怪が現れたので、源氏は浅間しくて世の中が厭わしくなる。生き返った紫上は、切に出家を望むので、源氏もとどめかねて五戒ばかりを受けさす。五月・六月は一進一退のさまで少しはよくなるが、六月に柏木の密通を源氏が知って、宮に対して疎遠になると共に、紫上は次第に回復に向かう。

六条院における紫上の存在の意義は他に比類がなく、明石上・明石女御・秋好中宮・玉鬘その他多くの女性の中心的存在であり、いわば扇のかなめのような地位にある。女三宮の降嫁を考えた朱雀院は、「方々にあまたものせらるべき人々（源氏の多くの女）を、知るべきにもあらずかし」と、全く無頓着なさまであったが、紫上の存在を無視したのは乱暴であり、粗雑な考え方である。紫上が脱落したら、源氏が築いた六条院の世界は崩れるが、今やまさにその危機に瀕している。その危機を招来した紫上の思いを整理すると、(1)宮は若くて、後見も極めて強いが、自分は年をとっていて、後見が全くないこと、(2)唯一の頼みは源氏の愛情であるが、それも年をとってはいつまで続くか分らないこと、(3)以上のような不安から脱け出るため、今のうちに出家したいこと、(4)しかし源氏の同意を得ないのでその心に背き、源氏を歎かせて出家することもできないこととなる。この中苦悩の原因は(1)と(2)とにあり、(3)と(4)とはそれから脱け出す配慮である。この(1)(2)は女三宮の出現によって起こされたもので、宮が出家した後はこの思いは起こらず、御法の巻で強く出家を望む時は、病気がちであることを理由としている。身の不安の思い、源氏の愛情のたのみがたさなどは、すべて宮との対比から起こったもので、宮が競争相手でなくなれば、解消する。しかし苦しい思いの中でも、(4)の思いがあるため六条院体制は持続された。外面的には平穏であっても、紫上は苦しさに堪えられず、ついに病に倒れたのであり、内面的には六条院体制は破れている。

愛情のことで紫上をこのように苦しめ、現世離脱の思いにまで追込んだのは、「現世的あはれ」の基盤に立つ六条院体制の破綻を意味する。六条院の平穏な栄花は源氏の好き心の自制の上に、換言すれば、愛情の戒慎・調整の上に成り立っていたが、それが破られたため、紫上の苦悩となり、出家の願いとなり、六条院体制は破綻することとなる。但し紫上の源氏への愛情のため、表面的には六条院は破綻しないが、紫上の堪忍にも限度があり、いつかは自滅の悲運を迎えるものと思われるが、それを救ったのが密通事件である。このため、宮が出家したので、紫上の心は安まるが、それにしてもあの大患の後は病気がちになって、そこはかとなく悩んで健康は回復

せず、たゆみなく出家を希望しつづけるのである。紫上の苦悩で蝕ばまれた肉体は弱って、出家を望みながら亡くなるので、降嫁事件は紫上の心身を痛め、その道心を培い、死期を早めたといえるであろう。

次に降嫁事件における女三宮の意義を考える。この事件には、朱雀院の聟選びの詮議と源氏の受諾、降嫁後の紫上の苦悶とに大きく分けられるが、宮はいずれの場合にも受動的立場にあって、積極的なはたらきかたはしていない。消極的に存在して、前者では源氏の心をそそり、後者では紫上の心を痛めている。六条院という既成の世界に割込んで、表面的にもせよ融和と保つためには、子供のようなはかないさまの受動的な人間でなければならない。宮のはかなく頼りないような受動的人間像は、必要があって造型されたのである。物語を進展さすため要請される宮の人間像の要素は、第一に源氏の感興をそそるに足ること、第二に六条院の世界と、即ち紫上と融和し得ること、第三に表面は融和しても、内実では紫上を脅かす力を持つことなどである。第一のため、宮は身分（内親王）・血筋（藤壷の姪）・若さなどが用意され、第二のために、はかなく頼りない子供のような人がらが与えられ、第三のために(1)基本的には第一があり、その上に(2)源氏の愛情をうける女に生長して行ったことがある。若菜の上巻では、第一、第二と第三の(1)が、下巻では、その上に第三の(2)が加った人間となっている。かくて源氏の好き心の対象となり、無意識の中に紫上を苦しめて、六条院体制を傷つけるはたらきをする人間となった。それが宮に与えられた任務だとして、そのことに積極的意義を認めることもできるが、宮は蔭の力となっているにすぎない。現実的には源氏の心が動き、紫上が悩んでいるのであり、宮の存在はその思いを誘発する蔭の力となっているにすぎない。宮が存在しなければ、源氏の心も紫上の心も動かないという意味では、宮の存在は重要なようであるが、実際の文芸的感動は宮の心には起こっておらず、源氏や紫上の心に培われている。その意味で宮よりも源氏と紫上との心情に文芸的意義があるとすべきである。要するに、降嫁事件では宮は蔭武者のようなもので、物語の場では殆どはたらいていないが、密通事件では表面に出る。従って降嫁事件の主役は源氏と紫上とであり、朱雀院と女三宮とは（但し二人の意味する所は全く違うが）第二義的存在とすべきである。

最後に源氏について考える。宮に対する好き心の動きが、この事件を引起こすが、降嫁の始はいささか宮に失望している。それでも紫上は苦しむが、宮が女盛りとなると共に、源氏も心が引かれるようになり、紫上の悩みはますます深くなる。紫上のことを思っては宮を迎えたことを後悔もし、紫上に対して心苦しくも、「あはれ」にも思うが、それも紫上の深刻な思いに比べれば甚だ浅い。しかし紫上が度々出家を希望するようになって、次第に紫上がなくては、生きておれない自分を自覚するようになる。この思いは紫上に対する真実の愛の自覚であり、紫上の病気にも心から力をつくすが、紫上の悩みの根元は自分が作ったので、申訳ないというような反省は殆どない。紫上が健康を損じて亡くなると、源氏も現世に生きる望みをなくするのであり、紫上のいない六条院の世界は存在しないのである。そのことを源氏は紫上が亡くなって、痛切に思い知らされ

る。降嫁事件では源氏は紫上を通じて心を痛めるにとどまるが、密通事件では紫上が救われるのと反対に、源氏が大いに苦しむ。要するに源氏の好き心による降嫁事件は、紫上を出離を思い、危篤に陥るほど苦しめ、密通事件は源氏に藤壷事件の順現業まで思わせて苦しめ、柏木を死なせ、女三宮を出家さすなど、まことに重大な結果を招来する。柏木は別として、この事件から宮は出家し、紫上も源氏も人生の無常を観じて、仏道に心を傾けるようになり、来るべき宇治十帖への思想的通路を拓いている。